

# 戦国期関東浄土宗教団の地域展開

— 下総・相模を中心として —

長谷川 匡 俊

## 目次

はじめに

一、戦国期関東地方の仏教状況

二、浄土宗教団の分布状況

三、相模国における展開

四、下総国における展開

(1) 浄土宗教団の位置と歴史

(2) 千葉郡における展開

むすび

## はじめに

浄土宗が、かの南禅寺禅僧虎関師錬に「元亨釈書」の中で寓宗と看破されてから約半世紀、浄宗中興の祖了蒼聖出づるに及び、以後浄土宗は戦国期南関東の地において、漸くその教団としての地位を確立するのである。

さて、関東地方における浄土宗教団の史的展開について、これを考える場合、基本的には三祖良忠門下の六派中、いわゆる関東三派おの／＼の教勢を絡らみ合せて検討せねばならない訳であるが、と云ってこゝで三派を総合的に捉らえてゆくことは極めて困難であるし、また戦国期という時期に焦点を合わせた際には、畢竟白旗派が他に比較し重点になってくるので、以下しばらく、私は白旗派を中心に、その地域展開を考えてみたい。たゞ紙教の関係から、この期にとって重視すべき教団の学問的展開について触れることが出来ない点、

あらかじめおことわりしておく。

学問的展開とは宗義上の問題を指して云うのであり、より具体的には「伝法」(伝宗伝戒)を制度化した宗侶の養成・宗学の展開を意味し、従ってこゝでは檀林(宗侶養成機関)の問題が論点としてクローズ・アップされてくるのである。

## 一、戦国期関東地方の仏教状況

関東地方における戦国争乱への展開を極く簡単に述べれば、まず宿命的ともいえる関東管領上杉氏と関東公方足利氏との抗争を軌軸とし、それにこの地方の千葉、里見、武田、佐竹等の在地領主(戦国大名)が相からみあって突入していったのである。これが文明年間に入ると、山内、扇谷両氏の団結が乱れて内紛が生じ、関東では両上杉氏と古河公方足利成氏との三者がてい立し、成氏方には千葉、里見、武田等房総の諸大名がついたたのであった。しかるに、明応年間に入ると、房総南部では里見氏の勢力が増大し、武蔵、相模においては山内上杉氏が優勢を示す一方、古河公方は成氏の死後(明応六年)は衰退をたどり、千葉氏も先の内乱以後は不振を呈していた。ところが、この頃伊豆に起こった北条氏の勢力は次第に上杉氏を圧倒して、関東は、新しい局面をむかえるのである。その後の関東は、天正十八年秀吉の東征までこの北条氏の侵攻を中心に展開されてゆくのである。

さて、関東地方の仏教状況を概観してみたいと思う。ところで、仏教諸教団の地域展開というような面での研究は、近年漸く盛んになって来たとはいえ、い

表1 関東地方宗派別寺院数集計表

計	不詳	真言律	羽黒行人	本山(ヶ)	当山(修験)	普化	黄檗	時宗	真宗	浄土	臨濟	曹洞	日蓮	天台	宗派名/国名	
															常陸	下総
三三四								五	三	二	四	九	二	六	二	二
二五八							一	一	五	一	一	一	五	二	二	二
一六四	一						二			三	一	一	七	二	三	三
四三									六	一	三	六	七	一	三	三
二二								七	一	一	三	六	二	二	三	三
七九								五	三	八	七	四	三	一	三	三
二五三		二		七	六	二	二	一	八	二	五	三	二	一	三	三
二九一			四	七	六	二	二	六	二	五	三	三	一	六	三	六

(武蔵・常陸・下野・上野については「日本仏教の地域発展」(仏教史学) 関東地方所収。下総・上総・安房については各郡・国志、相模は「新編相模国風土記稿」による。

まだ緒にいたばかりで、充分なる成果は今後に期待しなければならない。しかるに、この中であって仏教史学会によって編まれた「日本仏教の地域発展」(S36)は、一応それまでの研究成果を問おうとする画期的な試みとして高く評価される一編である。こと、関東地方に關しても、紙数の關係上概説的な域を越えるものではないが、近世以前における当地方の仏教状勢を通して、多くの問題点を指摘し、今後の研究課題を提示されている。

次に、表(一)に目を移すと、大略次の二点が指摘できると思う。その第一

は、旧仏教系勢力、就中、真言宗勢力の強大なることと併わせて新興諸教団のこの地方における展開の限界という点。第二は、諸教団の当地方における教線進出が大体において関東中部にとどまっていること、である。第二点については、いま一応触れることはさげ、以下しばらく第一点のみについて考えてみよう。関東における真言宗の中心は、相模大山寺、上総新勝寺、武蔵金剛寺の後世関東三不動と称された諸寺であったようだ。特に大山寺は真言修験道に属し、幕府より寺領の寄進を得て繁栄した。これらのほか千葉寺、神野寺等古代創建と伝える寺院は多く、これら寺院を中心とし、鎌倉時代に幕府、有力武士の保護をうけて建立された鎌倉補陀落寺、足利鋺阿寺、金沢称名寺等が、民間信仰と結合する一方加持祈禱を中心とする修験道をも包摂しつゝ、武士のみならず一般民衆の間にも強固な地盤を形成していったと思われる。先の表からも、そのあらわれた数字の背景を考へる時、この地方で各教団が教線を拡張してゆくには、なんといつても先ず武士(有力在地武士)の帰依を得るということが肝心なものであり、それはこの地方に在地領主による惣領制的支配体制が根強く残っていたことによるものと思う。日蓮、曹洞、浄土等各教団にしても在地武士の外護を受けて順次教線を伸張させて行っているのである。浄土宗教団については後に述べるとして、日蓮宗が上総、下総の地に繁茂している由因は、千葉氏(胤貞流一門)と中山法華経寺の關係に代表される在地支配権力の外護<sup>1)</sup>庇護によって社会の基底部まで深化されていったのであり、京都における有力商人との結びつきはその由因を異にするのである。<sup>2)</sup>曹洞宗については、その初期にあつて下総の結城氏に、その後戦国末期の頃には、武蔵の太田道灌、伊豆、相模、武蔵の北条氏康、氏政などの戦国大名の尊信をうけ、各領国毎に教線を拡張していったのであり、それが一たび民間の中に進出してゆく場合には、真言宗に見られるような加持祈禱を中心とした密教的現世利益信仰を標榜してゆかねばならなかつたであらう。即ち、この地方においてコンスタン丁に教線を張っている真言、曹洞、就中、真言宗は、一方において在地権力と結びつくと同時に、地方社会の底辺(農村)にまで、彼らのいわば低俗な宗教的要請に応じつゝものゝ見事にいくこんでいったのである。先に述べた新興諸教団のこの地方における展開の限界とは、実に、この農村への進出をさしているものであり、これといかに密着するかが戦国期関東地方における教線の

指導権を左右する鍵を握っているものといえるのではなからうか。関東は畿内近国にくらべ人口密度が低く、在地の需要が少く、商業の発達も遅れていたが、殊に農業生産力が畿内近国よりもはるかに低かったと思われ、同時に後進地域の特徴として在地領主の惣領制的な支配体制が根強く残存し、生産物地代のほかに一定の基準もなく農民を馳使することが多く、彼らをひどく苦しめていたようである。斯様な状態におかれた農民層は、恐らく単に現実をいかにして生きるかに追われ、文化的水準も低く、従って宗教的意識も低俗で加持祈禱を中心とした現世利益信仰によっていたものと思われる。この場合、畿内、北陸、東海地方などで農民層を基盤として目覚ましい展開を遂げている真宗教団とを考えあわせてみる時、一見不思議に思えるのであるが、この点については、たとえば、これらの地方が関東に比較して社会経済的により進んでいたから、<sup>(註4)</sup> 或いは郷村組織が発達していたこれらの地方では、村落共同体がそのまま真宗教団に加入していった<sup>(註5)</sup>（郷村組織＝教団組織）というような見解にその解答が求められるようである。

一応、このぐらいのことを頭に入れて、それでは本題の浄土宗教団の展開に目を向けてみよう。

## 二、浄土宗教団の分布状況

戦国期における関東浄土宗教団の規模を、いまこゝに正確に復元することは極めて困難であるが、一応の目安として、次の二つの表を作成してみた(表(2)は参考程度として)。

表(2) 寛永本末帳記載寺院地域別集計表 (寛永9年)

国名	武蔵	相模	下総	上総	安房	下野	上野	常陸	奥州	信州	不詳	計
浄土宗	103	101	5	2	3	5	2	7	5	1	3	45
諸寺之帳	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
増上寺	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
末寺帳	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
計	107	104	8	5	6	8	5	11	8	4	7	126

(\*) ( )内の数字が関東の寺院数

表(3) 関東地方旧郡別寺院数集計表  
建長元年(一二四九)～天正十八年(一五九〇)

国名	郡	別	寺	院	数	備考															
常陸	那珂郡	茨城郡	久慈郡	新治郡	筑波郡	信太郡	河内郡	三	不詳												
								一	不詳												
								二	不詳												
								三	不詳												
								四	不詳												
								五	不詳												
								六	不詳												
								七	不詳												
								八	不詳												
								九	不詳												
								十	不詳												
								十一	不詳												
下総	葛飾郡	香取郡	匝瑳郡	相馬郡	岡田郡	猿島郡	海上郡	千葉郡	五	不詳											
									六	不詳											
									七	不詳											
									八	不詳											
									九	不詳											
									十	不詳											
									十一	不詳											
									十二	不詳											
									十三	不詳											
									十四	不詳											
									十五	不詳											
									十六	不詳											
上総	武射郡	夷隅郡	望陀郡	周准郡	天羽郡			二	不詳												
								三	不詳												
								四	不詳												
								五	不詳												
								六	不詳												
								七	不詳												
								八	不詳												
								九	不詳												
								十	不詳												
								十一	不詳												
								十二	不詳												
								安房	安房郡	平郡						三	不詳				
四	不詳																				
五	不詳																				
六	不詳																				
七	不詳																				
八	不詳																				
九	不詳																				
十	不詳																				
十一	不詳																				
十二	不詳																				
下野	芳賀郡	河内郡	栃木郡	塩谷郡	安蘇郡											二	不詳				
																三	不詳				
								四	不詳												
								五	不詳												
								六	不詳												
								七	不詳												
								八	不詳												
								九	不詳												
								十	不詳												
								十一	不詳												
								十二	不詳												
								上野	群馬郡	緑野郡	邑楽郡	甘楽郡	利根郡	山田郡		三	不詳				
四	不詳																				
五	不詳																				
六	不詳																				
七	不詳																				
八	不詳																				
九	不詳																				
十	不詳																				
十一	不詳																				
十二	不詳																				
武蔵	埼玉郡	足立郡	江戸郡	荏原郡	豊島郡	多摩郡	橘樹郡									榛沢郡	比企郡	児玉郡	男衾郡	二	不詳
																				三	不詳
								四	不詳												
								五	不詳												
								六	不詳												
								七	不詳												
								八	不詳												
								九	不詳												
								十	不詳												
								十一	不詳												
								十二	不詳												
								相模	足柄下郡	鎌倉郡	大住郡	高座郡	足柄上郡	愛甲郡	三浦郡						
四	不詳																				
五	不詳																				
六	不詳																				
七	不詳																				
八	不詳																				
九	不詳																				
十	不詳																				
十一	不詳																				
十二	不詳																				

ここで、上記の表に關連し、尚且つ本章及び次章における所論中、主要な史料二点につき、その簡単な紹介と史料操作上の留意点並びに若干の補足をしておきたい。

はじめにあげる史料は、知恩院所蔵の「蓮門精舎旧詞」(現在「統浄土宗全

書」一八、一九所収、以下「旧詞」という)である。まず、「旧詞」について簡単に説明しておこう。本書は元禄享保年間に、知恩院を事実上の触頭として浄土宗寺院全体にわたって調査記録した資料であり、この中には、整理されうる限りにおいて各寺の開創年代、開基名及び略縁起、また本末関係に至るまで記載されている。故に、近世の浄土宗教団について考える場合には、特に欠かすことのないものであると同時に、全国の浄土宗寺院の殆どが統一的意思のもとに包括されているという点で史料として抜く際に(具体的に、ある年代、ある地域に何箇寺存在していたかを調査する場合のこと)、どの程度の信頼がおけるかということになると、種々の問題にぶつかろうが、総体的にみて、次の三点が指摘出来るであろう。①国によっては本書に書漏れた寺院がかなりあったと思われること。しかし大勢には殆ど影響はないと見てよからう。②

う。

次にあげる史料は、内閣文庫所蔵の「浄土宗諸寺之帳」「増上寺末寺帳」の二冊、合わせて通称「寛永本末帳」という。この本末帳は、寛永九年(一六三二)に江戸増上寺了学が触頭となって、その支配する浄土宗寺院(関東が殆んどで東北も多少含まれている)について書上げたものである。その意図は、天正十八年家康江戸入城以来、幕府や諸大名が前代からの大寺や新造寺院に寺領を寄進してこれを保護し、また戦乱で廃絶した寺跡を復興させたりしたため、それによる寺院数の激増をきたし、これを取締る意味で新寺禁止令(寛永八年)が出され、翌年からその徹底のために各宗本山から末寺帳を提出させた。これはその時のものゝ一部であり、当時増上寺が関東総録所であったところから当寺が触頭となったものである。浄土宗教団における末寺帳としては現存中最も古く、作成の意図が意図だけに記載された部分については地名に若干の誤謬があるほか正確なもので、当時の関東浄土宗教団の本末寺院構造を理解する上においてはまだに恰好な史料であり、あわせて当時の関東十八檀林寺院おのの本末寺院組織の進度が知られ、興味ある問題を提示してくれる。ただ残念なことには、これにも多少書漏れ寺院があったと認められる点である。これに関連して、靈山寺、伝通院、靈巖寺(いづれも檀林)等の大寺及びその末寺の記載が欠けており、全体としては孫末寺に関する記載も乏しいため、この本末帳に関東の全浄土宗寺院が網羅されているとはみなされない。この点については、先の「旧詞」「檀林志」の記述によっても首肯出来、おたがいの不備な部分は検討のすえ、相補い合せて充分に近いものとなるであろう。

なお「檀林志」については、上記二史料に比較し、後世(文政年間)のものなので、その信憑性は薄いと思われるが、またいちがいにそういえない面もある。いづれにしても両者を補充する意味では彼立つものである。

以上をのみ込んだうえで先の表に立戻って所論をすゝめてみよう。まず、表(3)によれば、戦国期関東地方におよそ三五〇ヶ寺(正確には三二三ヶ寺)の浄土宗寺院があったと思われる(開創年代の判明する限りにおいて)、そのうち最も寺院数の多い地域は武蔵国であり、以下相模、下総、常陸、上野、上総、下野、安房の順序で続いている。武蔵国寺院数の全体に占めるパーセンテージは、三九%を示し、この国においては時代の降るに従って寺院数が増大して居る

③略縁起に記載されている部分の信憑性。たとえば地名等の誤謬も若干あるが、特に開創年代については不明のものももとより、判明のものにしても必ずしも正確なものばかりではないと思われること。なお、この三点を考慮して史料操作を行うならば、当面の問題に関しては充分活用できると共に、またいろ／＼な問題の提示をしてくれるものである。このほか「旧詞」全般にわたる詳細な史料の限界については、いま述べるべき用意をもたないが、当面の研究テーマに則し、関東地方の寺院数の不正確なる点についてのみ触れれば、常陸、上野、相模、下野の四ヶ国に関しては、次の史料によってより以上の寺院数があったと認められる。尚、下総国についてはのちほど詳述する。他三ヶ国についても勿論若干の過不足があったことは否定できない。史料。一、寛永本末帳(「浄土宗諸寺之帳」。「増上寺末寺帳」)。二、関東十八檀林の各「檀林志」(「浄土宗全書」十九、二十所収)。三、常福寺文書所収「末山由緒帳」他。四、「新編相模国風土記稿」。以上、なお、開創年代不明及び書漏れ寺院などについては、「檀林志」の記載により補える部分が多い。前掲の表は、「旧詞」と「檀林志」に若干の当該文書を加えて、関東地方における天正十八年までに開創された寺院数を旧国郡別に集計作成したものである。従って充分とはいえないまでも、竹田氏の集計に比較して幾分正確度が高くなったと云えるのである

団ことも一応含んでおかなければならない。いま表(2)を参考に見れば、寛永九年段階には少くとも武蔵国に二二三ヶ寺が存在し、関東全体の四一%を占めている。なお武蔵、相模、下総の三国で関東全体の七四%(寛永九年にも同様)を占めておけることは、浄土宗教団が関東南部をその基盤としていることを示すものと云えよう。これについては、①これら地域が教団史上なんらかの基盤(因縁)を持っていたこと。②檀林などの大寺が多く存立している地域であり、それを中核として地縁的に末寺が存在し、一大本末圏を形成していたこと。たとえば、この地域に相模鎌倉光明寺、武蔵の増上寺、下総の飯沼弘経寺など戦国期関東浄土宗教団の中核をなす寺院があげられよう。③戦国武士(大名、領主クラス)の外護が強力な地域であったこと。のおよそ三点に起因しているものと思われる。関東浄土宗教団の歴史的展開は、竹田氏の集計によっても明らかなく、応仁の乱後、文明明応期頃がひとつの転機となつて居り、この大乱による旧仏教団の衰退とうらはらに新興諸宗が發展を遂げるのである。旧仏教系勢力の根強いこの地方でも、新興諸宗への転宗、改宗が見られるのはこのことを意味する。しかし、なんといつても戦国期関東浄土宗教団が、のちの関東十八檀林によつて代表される目覚ましい隆盛を迎えるに至るには、北条氏を中心とする戦国大名などのより積極的な進出をまたなければならなかった。

次に注目しなければならぬ点は、武蔵、相模、下総、常陸など浄土宗教団の伸張している国においても、こまかく調査してみると、教線を張っている地域が限られているという現象である。まず、武蔵国の場合は、埼玉足立両郡に最も多く分布し、案に相違して江戸、荏原、豊島などの地域は前者に比較し劣っている。これが、家康江戸入城以後になると様子が逆転し、後者が前者を凌ぐようになる。即ち、その地域の為政者なり、支配者が教団(一般に在地領主などには教団という意識はなかったであろうが、ここでは間接的な意味も含めて)發展に援護するか否かの問題が浄土宗寺院の建立の多少を規定する一つのバロメーターとなる。相模、下総については後に触れるので、次に常陸に関して云えば、那珂郡に寺院が集中していることが知られよう。この地域は戦国大名佐竹氏の領国内であり、延文年間以太田城主佐竹義教の外護のもとに、関東浄土宗教団における一方の大寺、瓜連常福寺(関東十八檀林の一)が開創され

て居り、周囲にその末寺が佐竹氏一族及びその家臣の手によつて建立されていく(註7)。つまり、この郡に浄土宗寺院が多いということは、常福寺を中心とした常陸国浄土宗教団の本末圏が那珂郡に集中しているということである。これらによつて、先に関東浄土宗教団の地域發展(武・相・総)につき、その起因を三點あげたことの不当でないことが理解されよう。最後に、武蔵国の寺院数が他国に比較し、圧倒的に多いことについて若干触れたい。まず特徴的なことは、この国の寺院一二十六カ寺中、三分の一以上が天正年間に開創された寺院であることと、先に述べた埼玉、足立両郡に寺院が密集していることの二点だが、これは北条氏(氏照)がこの国に勢力を扶植して以後、急激に教線が拡張したことの証左の一つとなる。要するにこの国に寺院が多いことの由因は、①北条氏の外護によること。②聖聰以来(応永以降)増上寺の力が強く働いていたこと。③地理的に云つて、下総と相模の中間に位置し、戦国期などにおいては学僧の行来も多く、そこにとどまる僧侶もあつたであろうから。④旧仏教系の勢力は全般的に強大であつたからともかくとして、相模における曹洞宗、下総における日蓮宗といった新興宗派のライバルが戦国中期頃まではまだこの地に根をおろすに至つていなかったこと。⑤他国にくらべ戦国大名の興廃変転が著しくそれだけに宗教政策等、領主の強圧的な態度がみられず、そのつど外護を仰いだものと云えよう。また同時に他国に比し、大名の直接支配から離れた小領主、国人達が多く、彼ら在地武士の外護によつて開創された寺院も多かつたであろう。一応以上の五点に帰するであろうと思われる。先に、戦国期関東地方における浄土宗教団の展開につき、表(3)を中心に概観した訳であるが、畢竟、武蔵、相模、下総の三国を中心に考えてゆかなければならないことが理解されたと思う。

そこで次には、当面私が調査をすゝめている下総を主とし、相模の場合にも若干触れながら、前者では浄土宗寺院の少ない千葉郡を、後者では逆に多くを占めている三浦郡を、それぞれ中心に、より具体的にその展開の仕方を検討してみたい。

### 三、相模国における展開

相模国内における各宗寺院数については、前掲の表(1)に見られる如く、曹

洞、真言に次いで浄土宗は第三位を占め、以下臨濟、日蓮……と続いている。特徴的なことをあげれば、この国には当山、本山両派修験のような現世利益中心の信仰が盛んであったこと。殊に大山寺の如きは真言修験道に属して相当繁栄していたようであり、真言、曹洞両宗がかなり伸張していることは、特に斯様な現世利益を媒介として民間に広くい込んでいったことを物語るものと云えよう。またこの国における各宗分布状況を調べると、浄土宗教団に関しては三浦、足柄下両郡に、就中、三浦郡に最も多くの寺院が存在し、他宗を大きく引離している。ことに、相模国全土において絶対多数の寺院数を誇っている真言、曹洞の二宗も、本郡については全く影の薄い存在である。おまけに、他郡において著しく発展している修験道までそれほどではない。恐らく、この地域では新興の浄土、日蓮、真宗などの宗派に押されて、密教系宗派の進出する余地がなかったものと思われる。また、表(4)によれば、天正以前(戦国期)に存在していたと伝えられる寺院数の状況もわかる訳だが、戦国期内にはほぼ各宗の勢力状況が決定していたと見られる。

表(4) 三浦郡宗派別寺院数集計表(「新編相模国風土記稿」ヨリ)

宗派名	浄土	日蓮	真宗	臨濟	曹洞	真言	天台	時宗	修験
寺院数	63 (37)	41 (22)	35 (17)	29 (20)	16 (2)	13 (4)	2 (1)	2 (1)	?

\* ( )内の数字は、中興、改宗も含めて天正以前に開創されたと思われる寺院数  
本郡は、鎌倉時代以来源氏に所属した三浦氏の領するところであったが、泰村の代(宝治元年)に鎌倉幕府の執権北条氏に叛き、一時秦村以下一族郎等五百余人が自殺し、殆ど全滅してしまつた。その後支族が勢力を回復して本郡の主となつたのであつたが、永正十五年七月三浦介義同は北条新九郎入道早雲と合戦し敗れ、これより小田原北条氏の所領となつた。その後天正年間北条美濃守氏規、本郡の領主となつて三崎を居城とするという(「新編相模風土記稿」)。下記の地図参照

本郡において、天正以前に開創または中興、改宗されたと思われる浄土宗寺院のうち、約半数が北条氏全盛時代に建てられた寺院であり、この間に最も浄土宗教団の教線が伸張されたことであろう。これを裏書きするものとして、「鎌倉光明寺文書」(鎌倉市史料編所収)の中に、次のような印判状が見られ

る。

三浦郡南北一向衆之檀那、悉鎌倉光明寺之可參檀那者也、仍如件

(天文元年)  
享祿五年七月廿三日  
(末印、印文「新」)

光明寺

また、本書注においては、手印は誰人のものか未だ判明していないが、恐らく北条氏綱が、その一族または家臣のものであるとされている。右の印判状から察するに、「南北一向衆之檀那、悉云々」という言葉からすれば、よほど深刻な事態が生じていたと見なければならぬ。想像をたくましくすれば、当時畿内近国においては一向宗が転戦し、天文元年、この年はちょうど大和で一向一揆が起こり、興福寺が焼き打ちされて居り、彼らの勢力は実にあなどりがたいものとなつていた。この相模国三浦郡においても、北条氏の領国経営上一向宗の動きが一つのガンとなるまでになり、そこでその対策として、一向宗に帰依している信徒をしてこの地域に最も根を張っている浄土宗(同じ浄土教で

相模国図



注目すべきは浄土宗寺院の多い地域、三浦郡と足柄下郡が両極端に位置していること。

あることも含まれて)に転宗させ、その元締めである鎌倉光明寺の信徒となるよう強制し、その旨先方の光明寺へ印判状を以て差出すに至ったものであると推察される。ちなみに、この郡の浄土宗寺院はその殆どが鎌倉光明寺の末寺であるのに対し、この郡の次に浄土宗寺院が多く存在する足柄下郡の寺院が、増上寺及びその他の大寺を本寺として本末関係を結んでいる点を左の表(5)に見ても先の件がうなづけるものと思う。

表(5) 鎌倉光明寺及び増上寺等における郡別末寺分布集計表(相模国内)

郡名	寺名		計
	光明寺	他大寺	
三浦郡	六	四	四〇
鎌倉郡	八	五	一三
足柄下郡	三	二四	二七
津久井郡	二		
大住郡	一	二	三
高座郡		三	三
足柄上郡		一	一
海綾郡		二	二
不詳	四	三	七
計	五	四〇	一〇〇

「寛永本末帳」ヨリ

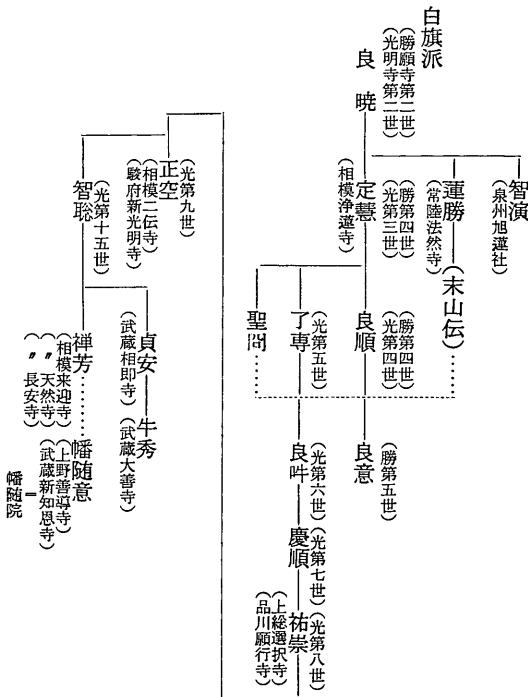
さてそこで、以上の点をもう少し掘り下げると同時に、鎌倉光明寺及びその法系の展開を中心にして、この国における浄土宗教団の位置付けにまで言及してみたい。はじめに触れておかなければならないことは浄土宗鎮西白旗派宗義史上、宗戒両脈を相伝して法燈を伝承してゆく系統に二つの法系があるということである。その一つは、白旗派々祖良暁の弟子定慧の法燈をひく本山伝であり、他の一つは同じく良暁の弟子運勝の法燈をひく末山伝である。前者は鎌倉光明寺(初期の正確なる寺名、位置については古来教説あっていまだ不明確である)を中心としてその教化をしき、後者は常陸国瓜連常福寺、下総国飯沼弘経寺及び武蔵国員塚増上寺に法燈をかゝっていた。この二系統について、宗義

史上、いわゆる質の問題としてはあまり重要な論点とも思えないが、関心をひくことは、両系統の展開が一応戦国末期の頃まで、そのまゝ関東地方における浄土宗教団の地域展開に結びついていたことであり、同時に両系統間内部において、たがいに派閥的ライバル意識とでも云えるような関係がもたれていたことである。そして意識は特に本山伝において高まっていたようである。

相模国浄土宗教団の展開史上、本山伝、鎌倉光明寺系について考えるにあたり、まず系図(1)を見てみよう。これによると従来鎌倉光明寺の住職は、武蔵

系図(1) 本山伝の法系図

\* 「総系譜」では智演の位置が了専の下になつてゐるが、今、「新撰往生伝」の通説に従つた。



国箕田勝願寺の住職を兼帯していたのであるが、光明寺住職了専の時代には、良順の弟子良意が勝願寺の住職をつとめ、その後良意入滅(永享元年)してしまふと、適当な相続者なく、中絶して彼寺は真言宗に属してしまつたという。ここに、本山伝は鎌倉光明寺においてのみ相伝されるに至り、以来幾久しくこの

系統は伸び悩んで、常陸、下総、武蔵等の末山伝の進出により、影の薄い存在となっていたのである。しかるに、明応年間観誓祐崇出でて光明寺第八世の法燈を相承するや、彼は大きい他地域への教化を推進させた。即ち、上総国望塵郡木更津に選択寺、武蔵国品川に願行寺、駿河国府中に竜泉寺（後の宝台院）、同国江尻に江浄寺等の諸寺を開創し、本山伝の教線拡大のために活躍したのであった。先の「光明寺文書」には御土御門天皇からの勅願寺及び紫衣の綸旨が収められて居り、かくの如く祐崇は御土御門天皇の尊信厚く、これに先だつて明応四年三月には、同文書中の「仏説阿弥陀經奥書」に、

明応四年卯乙三月 観誓上人上落、在参内着香衣、光明寺勅願寺ノ綸旨  
同此阿弥陀經ヲ自内裏給、(御土御門天皇)於知恩院可有講談有御所望、三七日之間ニ談義  
畢

舍利弗ハ有卅八

とあつて、勅召によつて上洛参内し、「阿弥陀經」を賜つて居る。鎌倉光明寺は祐崇時代に朝廷との関係も持ち、勅願道場関東総本山の号を賜つたと伝えられ、末山伝に対抗して大いなる発展を遂げたのであつた。しかし、彼の滅後（永正六年）、その法流から天正年間に、牛秀、幡随意などの碩匠出づるまで約七〇年間の光明寺の歩ゆみについては、今日判然としない部分が極めて多く、従来看過ごされていた訳であるが、私はこの間こそ、先に見た如く北条氏が相模全土を統合支配していた時期に当り、北条氏の援護なども受けつゝ三浦郡を中心に光明寺系僧侶の伝道が行われていたと思うのである。またちようどこの頃は、末山伝の最も隆盛を極めた時期であり、当国相模の地にも漸く教化の波が押寄せて来た。しかしながら、この中にあつて三浦郡のみは、鎌倉光明寺の位置する鎌倉郡材木座（当時はこの地に移転していた）と隣接して居り、古くから光明寺系の地盤であつたところから、既述の如く同系の僧侶によつて開かれた寺院が多く、光明寺の末寺に組み込まれて、まさに地縁的にも法縁的にも一群小本末圏を形成していたのである。要するに、本山伝鎌倉光明寺系についていえば、自国即ち相模国、わけても三浦郡においては、祐崇入滅以後もなお教線を確保保張していった訳であるが、地方進出、それも京都などへの結

びつきという点では、末山伝、殊に弘経寺系に比較して極めて見劣りするかの感があつた。

最後に、この国で浄土宗教団が歴史的に最も教線を伸張させた三浦郡における浄土宗寺院の開基（檀越）に関して触れ（「新編相模国風土記稿」による）、併せて戦国期浄土宗教団の社会的基盤につきいささか提言したいと思う。本郡における浄土宗寺院のうち天正以前に開創されたと思われるものは前掲の表（4）に見た如く、三七ヶ寺であるが、それらのうち開基の判明している寺院は極くわずかである。総じてこの国には和田義盛を開基と仰ぐ寺院が多いのであるが、これはまず殆ど当てにならないものと云えよう。そのほかにはやはり、北条氏或いは後北条氏の一族及び家臣の建立したと伝える寺院もあるが、注目に値するものとしては、開基〇〇〇〇と姓名共に記されており、法名まで書いてある場合も多い。そしてその下に小字で、「子孫村民にあり」とか「村民〇〇の祖」と記載されて居るものが、私見によれば七件ほどあつた（天正以後を含めると更に数がふえる）。これについては一がいに云うことは出来ないであろうが、当時において姓名共にそなえ、また法名にしても多く院号乃至番号などが付けられ、一般農民層には破格のものであること。その上一寺を開創するなど一般農民層の者とはとうてい考えられない。これは恐らく在地の地侍乃至土豪クラスの有力者に該当するのではなからうか。(註。)とすれば、戦国期における相模国（三浦郡）浄土宗教団は、上は北条氏の息がかかり、下は在地の有力土豪などの支持を得て発展していったものであろう。要するに、戦国期浄土宗教団発展の基盤は、上は戦国大名から下は在地の小土豪に至るまで、一応戦国武士にあつたと云え、その発展が檀林寺院を中核として学的に展開してゆく際には、戦国大名クラスの外護が必要となり、また地域的に幅広く、集密に展開してゆく際には、こういつた在地の土豪クラスの武士を基盤とすることが最も望ましかったのである。そしてこれら二ケースによつて建立された大小それぞれ寺院が、たがいの力関係により本末関係を結びつゝより大きな教団組織の中に再編吸収されてゆくのである。

#### 四、下総国における展開

##### (1) 浄土宗教団の位置と歴史



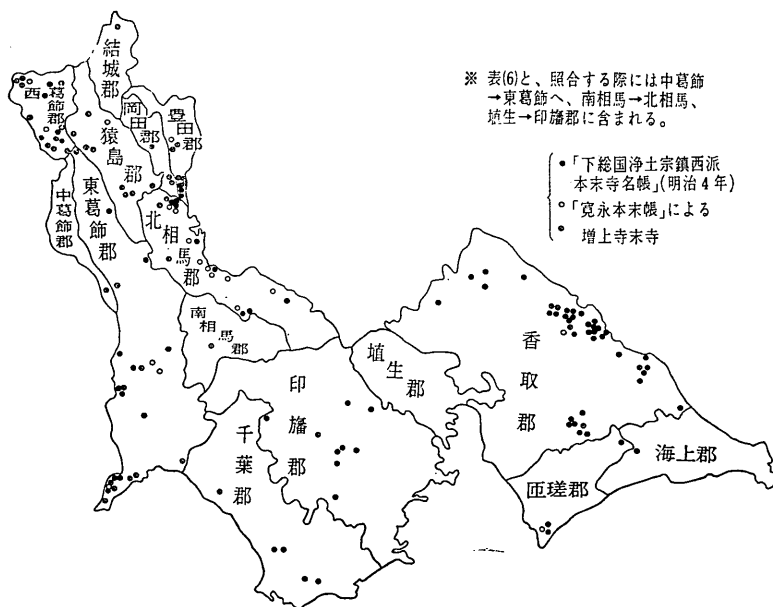
表(6) 下総国各宗派郡別寺院数集計表

郡名	宗派名					総計
	真言	天台	日蓮	曹洞	臨濟	
千葉郡	七	一〇	四	九	〇	一三
東葛飾郡	一五	八	六	三	五	三六
香取郡	二	三	五	二	二	一三
海上郡	六	六	二	四	〇	一八
匠嗟郡	八	五	五	一	〇	一九
印旛郡	九	八	七	二	四	二二
結城郡	三	〇	一	九	二	一五
岡田郡	六	一	四	二	三	一六
豊田郡	一	六	〇	六	〇	一三
猿島郡	四	一	一	五	六	一七
西葛飾郡	一	一	五	七	〇	一四
北相馬郡	三	二	一	六	五	一七
総計	六五	二七	二五	一四	四〇	一五九

明治42年発行各郡誌及び結城郡以下（現在茨城県）については、「下総国結城郡外五郡寺院明細表」（史料編纂所蔵・明治期のものか）により作成した。\*（ ）内は宗派不明寺院数

下総国における宗教状況一般を、いま寺院数のみからみると、表(6)のようになる。これによれば、地域的には香取、東葛飾、印旛の三郡に寺院が密集して居り、宗派別では真言宗が最大で、次に日蓮、天台と続き、浄土と曹洞が仲良く四位を分けあい、その他の宗派は極めて小規模のものとなっている。真言宗勢力の強大なる点は、関東地方全土の顕著な特色でもあるが、この地域では天台宗をも含めた旧仏教系勢力の濃厚性というものが強く看取される。もう一つ忘れてならないことは、日蓮宗の活発な地域であるということ。関東地方で日蓮宗寺院の最も多い地域といえは、前掲の表(1)によっても知られる如く上総国であり、この国に隣接しているということが、下総国における日蓮宗の教勢を大ならしめている一つの要因であろう。たとえば、表によっても千葉、香取といった上総寄りの地域に日蓮宗寺院が繁茂しているという事実はこれをよ

地図(1) 下総国浄土宗寺院分布図



※ 表(6)と、照合する際には中葛飾→東葛飾へ、南相馬→北相馬、殖生→印旛郡に含まれる。

- 「下総国浄土宗鎮西派本末寺名帳」(明治4年)
- 「寛永本末帳」による増上寺末寺

く物語っている。これと関連して房総は宗祖日蓮の生国であると共に、その門下の高弟も多くこの地から出ているということで下総国でも絶対的な強さを誇っている。また、東葛飾郡に寺院数が多いということは、関東屈指の日蓮宗寺院中山法華経寺とその末寺がこの地に根を下ろしているからであろう。しかしながら、この強大なる日蓮宗も、この国の北部即ち常陸よりの六郡（現在茨城県）においては、全体で八ヶ寺しか存在せず、宗派別順位第七位にあまんでいるしまつである。これほどまでに甚しい地域差による展開を見せているのは、こ

表(7) 下総国郡別浄土宗寺院分布集計表

郡名	千葉	香取	海上	匝差	印旛	結城	岡田	豊田	猿島	葛飾	相馬	計
寺院数	三	四	〇	〇	一	一	四	四	(十)	(十三)	一五	(十二)
同	五	四	一	四	三	一	五	一〇	一〇	四	二五	五
												二七

右記の表については、右側の数字は寛永九年の「浄土宗諸寺之帳」と「浄土宗増上寺末寺帳」より算出したもの。( )内の数字は後者より算出した数である。左側の数字は、明治四年の「下総国浄土宗領西派末寺名帳」(社寺取調類纂一四〇所収)国会図書館所蔵)より算出したものである。

\* 両帳とも地名等に書き誤りが多く、地名辞典等により多少修正した。

の国では日蓮宗以外に見当らない注目すべき現象である。ともかくも旧仏教と日蓮宗勢力の強大なることをもって、下総国の宗教事情の一大特色とみなした訳であるが、ならば一体浄土宗教団の実態はどのようなものであったのだろうか。

いま、表(7)によれば、寛永九年から明治四年迄の二百四十年間に約二、五倍の割合で寺院数が増加していることがわかる。もっとも寛永末本末張の史料批判を試みた際に述べた如く、実際には寺院数がより多かつたであろうから、倍率もこれほどまでにはならないものと思われる。そして、寺院数の増えかたは明治四年に近い方ではなく、いづれにしても寛永末年頃までには明治期乃至現在の寺院数とほぼ同等ぐらいに達していたことであろう。なお、本国における浄土宗集密地帯に、香取、葛飾、相馬の三郡を指摘できると同時に、地図(1)からも寛永期(それ以前からであろう)の寺院所在地を中心として後の寺院分布がなされていることがうかがえる。そこでその集密地帯について注目すべきことは、①利根川、江戸川等の川沿い地帯で、水運にめぐまれ比較的農業生産力も高く、交通も活発であったと思われる地域であること。②大寺院の周辺地区であること。他宗勢力の比較的弱い地域であること。などがあげられる。地域展開における他宗との比較ということになると、これまた重視すべき点がいくつかあげられる。①北部五郡(岡田、豊田、猿島、西葛飾、北相馬)では真言宗を別とすれば浄土系勢力が極めて強く、中でも浄土宗は真言宗の次に多くの寺院を有している。②北部の中でも一つ結城郡のみ浄土宗(系)の教線が及んでいないこと。③広範な葛飾郡の中でも西葛飾郡は浄土系勢力の強

い地域であること。④北相馬、豊田両郡にしても同様に浄土系勢力が強く、また浄土宗教団の地盤になつていくこと。(以上表(6)参照)

それでは、上記の諸点を念頭に入れながら次に表(8)に目を移してみたい。まずこの表をなんのために掲げたかであるが、それは下総国における浄土宗教団が歴史的・地域的にどのようなようにして生成展開していったかを考える上で、一応の指標となり得ると思つたからである。次に、表の基礎をなす「旧詞」の史料の限界について若干指摘したい。前に関東地方を扱う際の史料操作上における

表(8) 下総国各郡開創年次別寺院数集計表

年次	郡名											計
	葛飾	相馬	結城	猿島	香取	匝差	印旛	殖生	千葉	開創年代	判名	
延応一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
康永一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
正長一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
文明一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
永正一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
天文一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
永禄一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
文禄一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
寛永一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
開創年代	判名	判名	判名	判名	判名	判名	判名	判名	判名	判名	判名	判名
総寺院数	六	一	一	三	三	六	八	四	三	三	一〇五	

「蓮門精舎旧詞」より作成

限度については触れたので、ここでは下総国のみに関し述べることにする。「旧詞」には、下総国における大寺院、岡田郡飯沼弘経寺、葛飾郡小金東漸寺、千葉郡生実大蔵寺の三箇寺が記載されて居らず(その他香取郡の善雄寺、淨福寺等の大寺と目される寺院の名が欠けている。なお東漸寺と大蔵寺はそれ

らの末寺のみ記されている)、就中、弘経寺が欠けているということは、その末寺分布地域である葛飾、相馬の二郡及び豊田郡等の様相を大いに變えてしまつて居り、この点を差引いて考えねばならないことである。そして、これを部分的に補うものとしてまとまっているものは、前掲の「寛永本末帳」及び各「檀林志」である。

次に、上記の表(8)の年代区分について少しく説明しなければならぬ。まず最初の段階延応弘安期は浄土宗鎮西流良忠がはじめてこの国における伝道を開始してから、その門弟良暉(鎮西白旗派々祖)の時代までであり、伝道史上「応他期」と区分して考えたほうがよいと思つたからである。次の康永―応永期については、本来ならば二期に分けて考えねばならないところであるが、史料の不備な点を考慮し、応永年間飯沼弘経寺開創(「旧詞」には記されていないが)の期をもつて一段階とし、その後はさしつかえない限り殆んど三十年間を一区切りとした。なお付け加えれば、天正での区切りは十八年家康関東入国をもつて「応開東」における戦国期から近世へのエポックとみなすからであり、元和と寛永期を区分した由縁は、家康の江戸入城以後急激に増加していった浄土宗寺院数が、元和期をもつて頂点へと達したからである。つまり寛永九年の本末帳も前代までの急増をストップさせる一手段として書上げさせたものである。

本筋にもどり、本地域における浄土宗教団の展開を先の表(8)に見ると、大体三期に分けてその展開のしかたを考へることができよう。第一の段階では、良忠に代表される初期浄土宗の下総伝道ということで、この国は東国教化発祥の地であり地域的には香取、匝瑳、海上の東南部三郡に進出展開し、特に他郡に遊化し、あるいは上総にも飛錫したようである。また下総国中において今日正確に知られた教化の根拠地は、香取郡鐮木光明寺、同郡飯岡光明寺、匝瑳福岡西福寺の三箇所であり、そのうちの一、二の例を史料によりうかがつてみたい。まず、金沢文庫所蔵の「観經玄義分問書」識語には、

(一冊首)

建長七年乙卯四月四日

(二尾)

建長七年卯乙五月十七日

於下総国<sup>(逆丸)</sup>匝瑳御庄福岡

郷被談、能化然阿弥陀仏 五十七

良聖時年二十二才也

とある。然阿弥陀仏とは良忠のことであり、彼は建長七年一二五五には匝瑳郡福岡郷に住居西福寺かして門弟の指導に當つていたようである。また同年の「観經定善義問書」識語にも、

(一冊首)

建長七年乙卯三月四日

(一冊首)

建長六月十二年廿二始之

(一冊首)

建長七年正月十八日

(尾)

建長七年乙卯二月六月六日読了」中間日數三十六日、除闕月八日之」定也、同開衆五十人、能化然阿弥陀仏生年五十七也

(中略)

談処下総国匝瑳飯塚御庄」内松崎郷福岡村也

とあり、これも西福寺での講説をあとづけるものであるが、当時この地において五十人もの弟子がいたという事実は注目すべきことであると思う。このほかにも、いわゆる問書といわれるものは残存(金沢文庫)しているが、いづれも中国の善導、曇鸞などの浄土教祖師達の著書の講説を良忠がなし、弟子がそれを筆記したものである。また、それぞれの地における良忠の外護者は、鐮木光明寺⇨鐮木九郎、飯岡光明寺⇨荒見弥四郎、福岡西福寺⇨椎名八郎、共に千葉の一族であり、千葉氏との関係甚だ浅からぬものがあつた訳であるが、三氏はいづれも微々たる一、小地頭にすぎず、充分な資糧の供給は非常に困難であつたようである(なおこの間の事情については「浄土宗全書」二十所収大島泰信氏「浄土宗史」に比較的詳しい)。良忠の教化の主要部が特に香取、匝瑳、海上といった東南部に限られていたことは注意すべきであり、この現象は、①信州教化後、彼の遍歴をたどつてみると利根川の水系に沿つて関東に入つていたので、下総ではこれらの地方が中心になつたのであろう。②千葉氏の支族

がこれらの地域に勢力を張っていたこと。④他宗の触手が当時はまだそれほど伸びていなかったこと。の三点によるものと思われる。第二の段階戦国期前夜に至るまでの間は、猿島、葛飾といった西北部二郡を中心に良忠の法系関東三派中特に藤田派が軸となつて下総の布教伝道を促進させていった。即ち、派祖性忠入滅の翌年、正応元年、下総国猿島郡岩井高声寺を開きその義を弘通し、彼の法嗣良心(持阿)は彼寺の第二世となり、また当国葛飾郡小福田に無量寿寺、このほかその近接地には桜井村下大野正定寺、猿島郡長田村西泉田西光寺、森戸村伏木専修寺、猿島村内門大翁寺を相ついで建立し、彼の法系はその後も高声寺に住してその義大いに榮えていった。更に後年、この系統は良友、岷天、岷翁、岷州、岷長等相ついで出づるに及び、広く諸国に遍満し、殊に天文・文禄、慶長にわたつて奥州、越後、信濃、甲斐、三河、尾張等にまで拡大していった。ところで、この下総の地における浄土宗教団の飛躍的な発展をみるためには、白旗派の進出をさしおいて論ずることは出来ない。

では、しばらく前に遡り白旗派の法脈をたどつてみよう。派祖良暁の主なる居所については、三祖良忠の後を継ぎ、鎌倉佐介悟真寺(光明寺の前身という)及び箕田勝願寺はもとより中心地にちがいが無いが、下総国においては正和二年(一一三三)千葉の支族、船木中務禪門の請に応じ、海上郡船木御称名寺に住して宗義を講じて居り、この地における基盤も確立していたようである。その後の下総教化は本山伝(鎌倉光明寺系)によつてなされず、主に常陸太田の運勝及び法資瓜連の了実の末山系統の僧侶によつてなされてゆくのである。まず運勝は元応二年(一一三〇)四月十三日宗脈相承の爾書を良暁に受け、後郷里常陸にかえり念仏教化に専念し、延元元年(一一三六)同国久慈郡太田に法然寺を開創した。その後文保年中成阿了実、文和四年その弟子聖阿も瓜連より来り、未教化のこの地(常陸)において運勝は本宗を弘通し、更に同州人了実、聖阿を喚起して、常総武の浄教興隆の端を開いた点、その功績は大なるものがある。了実は延文三年常陸国主佐竹義教入道浄喜を檀主として当国那珂郡瓜連郷に、のちの檀林常福寺を建立し後継者の施化に尽力した。彼の門下より聖阿出づるに及び宗勢一変し、先にも述べた如く関東浄土宗教団は新しい展開期を迎えるに至るのである。問題の下総国においては、岡田郡横曾根の地に庵を営み、学徒の教導にあたり、教義上一宗の独立を喧伝していったのである。

周知の如く横曾根談所といわれるものがそれであり、後世檀林の渊源とされてゐる。第三の段階(戦国期中心)については、先の表のみからでは察知しにくい。それは云うまでもなく飯沼弘経寺系の寺院教が含まれていないからであり、この点を先に示した史料で補足すれば、浄土宗中興の祖というべき聖阿出現を契機とし、その後彼の高弟聖聡の門下から良肇が出で、彼は聖阿の横曾根談所を相続する共に、応永二十一年には横曾根城主羽生経貞、羽生城主羽生吉定等を檀越として隣接の地飯沼に一字を建立した。これが飯沼の弘経寺であり、その後当寺を中心に相馬、葛飾、猿島、岡田、豊田等へと下総国における浄土宗教団が展開されてゆくのである。そしてこゝより傑僧多く輩出し、三河、京都等に進出していったことについては周知の通りである。続いて、下総においては増上寺三世聖観の弟子経普愚底(清運)が、葛飾郡小金に城主高木氏を檀主として文明十三年にのちの檀林東漸寺を開創し、更に天文二十二年には飯沼弘経寺五世鎮誓祖洞の門下道普貞把が、千葉郡生実郷に領主原式部丞胤榮(千葉支族)の請により同じくのちの檀林大蔵寺を開創するに及んだ。こゝにおいて、戦国期下総国の浄土宗教団の展開は三大寺たる弘経寺、東漸寺、大蔵寺を中核としてなされてゆくのである。以上、この国における浄土宗教団の地域展開について、一応三期(段階)に区分し考察してきた訳であるが、時期的には頂点にまで達し、のち地域的にも順次広範に展開して現段階の原初的分布状況を呈するに至つた過程がほぼ理解されたことと思う。

## (2) 千葉郡における展開

下総国における浄土宗教団の具体的な展開のしかたについて、いま例を千葉郡にとり少しくこれを検討してみたい。はじめに、表(9)の方を見て問題点を把握する必要があると思う。

この郡において、浄土宗教団が自己の教線を伸張させてゆく上に、まず問題になってくるのは、この地域に真言、日蓮の二宗が繁茂して勢力をもっていることであり、就中、真言宗は恐らく深く在地の農民層と結びついて他宗の進出をはばんでいたことであろう。即ち、第一点として、真言宗寺院の開創年代及び開山、開基について調べてみる時、その詳らかでない寺院が多いということ。これはいわゆる民間無名寺院に属するものと推測され、農民の喜捨によつ

表9) 千葉郡各宗派開創年次別寺院数集計表 (千葉郡誌より作成)

宗派名	年次							計
	七〇〇	七〇一	七〇二	七〇三	七〇四	七〇五	七〇六	
真言	六	二	〇	一	一	三	七	四〇
日蓮	〇	〇	〇	一	〇	二	三	三三
天台	〇	〇	〇	〇	〇	一	二	二〇
曹洞	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	九
浄土	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二
計	六	二	一	三	三	四	二	七四
								一三

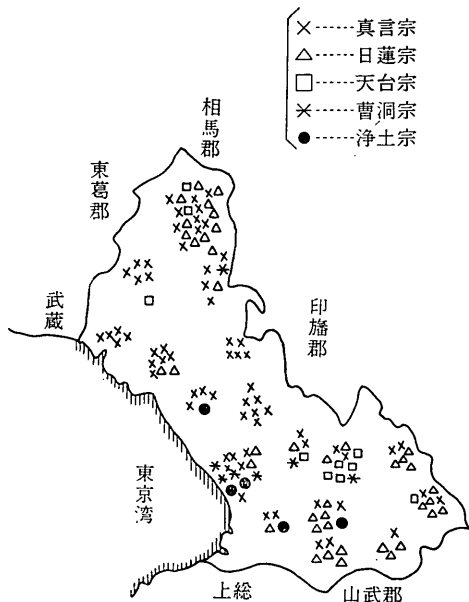
表10) 千葉郡各宗派寺院本尊種別表 (千葉郡誌より作成)

宗派名	本尊名							計
	彌陀	薬師	曼陀羅	観音	不動	釈迦	地藏	
真言	三	一	〇	二	三	〇	五	二
日蓮	〇	一	一	〇	三	〇	五	二
天台	五	〇	〇	一	〇	〇	〇	六
曹洞	二	一	〇	三	〇	〇	〇	六
浄土	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	五
計	三	二	一	六	三	三	五	二二

て建てられた堂的なものと思われる。第二点には、表(10)によってうかがわれる如く、真言宗寺院おの／＼の本尊を調べると甚だ一定しておらず、殊に観音、不動、地藏などの民俗的系譜を有した本尊を安置している寺院が多いことは、現世利益中心の民間信仰と合致している証左となろう。第三点は、図表によっても知られる如く、寺院分布密度が他宗に比較して高く、全域にわたりの村にも殆ど平均して滲透しているという点で、これも村民と密着して来た証拠になると思う。そのほかに、真言宗は最も古くこの地域に起って、以来

長年の過程をふんで農村地域に密着した宗教になっていたとも云えよう。以上三点を通じ真言宗の農村と結びついた強力な宗勢について見てきた訳であるが、次に日蓮宗はどうであったらうか。

地図(2) 千葉郡諸宗寺院分布図



地域的にみると、この宗の特徴は上総国に隣接した一帯に最も強く(既述のように上総は日蓮宗王国であるから)、また北部地帯にも一線をなしているが、中間地帯には奇しくも空間をもたらしている。要するにこれは中間地帯に存在する真言宗寺院勢力が古くから根を下ろして居り(寺院開創年代を調べると理解できる)、さすがの日蓮宗もこの地帯には伸張できず、これをさけて北部の一角を根拠地としたのであろう。歴史的には、十五世紀の後半を契機として、それ以後順調に伸びている。十五世紀の後半と云えば、京都妙満寺門流の日泰が活躍した時期にあたり、彼は上総の在地領主酒井定隆の帰依を受け、日蓮宗を大いに振興させた。有名な「上総七里法華」とは、この時の領主の宗教統制を指して称するものである。本郡にも日泰を開山とする寺院は多く、この地域における日蓮宗の礎を築いたものと云えよう。

その他の宗派については、天台、曹洞の両宗が、真言、日蓮二宗の間隙をぬってそれぞれ若干分布している。当面問題にしなければならぬ浄土宗など

は、全く影の薄い存在で、寺院数にしてわずかに五箇寺、その全宗派寺院数に対する比率は四%弱を占め最下位に位置している。以上により、千葉郡における各宗の分布状況等が一応把握されたと思う訳であるが、然らばもとに戻り浄土宗教団の展開についてメスを入れねばならない。

まず、時期の面から考えてみよう。前掲の表(9)によると、十六世紀の前半迄は真言、日蓮、曹洞等の宗派によって占められ、浄土宗教団がこの郡においてはじめて寺院を開創するのは十六世紀後半にはいつてからであることが知られる。十六世紀の後半と云えば、この地域においては文明十一年の臼井における千葉孝胤の敗退以来すつかり衰えてしまった千葉氏にとつてかわり、支族の原氏が主家をしのぐ力を持つて、元祖胤高(隆)の居城生実城を代々継承し、胤栄の時代に至つていたのである。斯様な当時、伝道困難なこの地域において積極的に布教化を展開し、はじめて浄土宗寺院を建立し、その宗勢を扶植したのは、飯沼弘経寺系の傑僧道誓貞把その人である。彼はこの地で生実城主原胤栄の帰依を受け、大巖寺を開創することになるのであり、またこれを契機としてこの地域及びその周辺に道誓をはじめ彼の法系の僧侶が寺院を開創するようになっていった。これらのことは重要な意味を含んでいるのである。それは真言、日蓮の地域に密着した勢力強大なるこの郡において、浄土宗がその教線を扶植してゆく上に、もつとも望ましいかたちとして在地権力との結びつきがなされたことである。原胤栄という大檀越に外護され、その後大巖寺は檀林として大きく展開してゆくのであるが、これととも、一たび地域民衆の泥くさい信仰の中に食い込んでゆくこととなれば、甚だ困難をきたしていたようである。即ち、道誓の大巖寺開創以後も若干の浄土宗寺院開創はあったが、この地域の民衆に密着した宗教勢を変えするには至らなかつたこと。それどころか、民間に食い込んでゆくためには檀林寺院とて現在利益を媒介として布教せねばならないような状態であつた。これを物語る唯一の手掛かりとしては、大巖寺における不動信仰があげられようが、これは開祖道誓が成田不動尊の稀有の靈験を感謝しあわせて有縁の人々にも広く御利益をこうむらせるために、成田不動尊(註10)の御影像を勧請して同寺に祭つたことにはじまると云われている。この靈験については当時の史料はなにもなく極めて疑問であるが、現に不動尊が当寺に祭られていることは確かである。しかしいつごろから不動信仰が行われるように

なつたかは詳らかでない。ただ云えることは、前掲の表(10)によつても知られる如く、不動や観音等のいわゆる密教的現世利益信仰を象徴する本尊が大多数であるこの地域の宗教事情よりすれば、檀林寺院であつても一方で民衆の素朴な宗教感情にマッチするような不動信仰をもつて民間に少しなりとも食い込むとする傾向にあつたのではなからうか。

この地域の浄土宗寺院は本郡南部生実城の周辺に分布し、大巖差の威光に浴していたことが知られる。とにかく、十六世紀の後半浄土宗教団にとつて未踏の地であつた本郡に、当時関東浄土宗寺院中であつて飛ぶ鳥も落ち勢いにあつた飯沼弘経差系の勢力が扶植されると、学問的には大いににぎわうところとなつたが、庶民階層を中心にした伝道展開はそれ程効果をあげ得なかつたようである。それは①浄土宗教団が武士階層の外護を仰いでいたこと。②真言、日蓮などの宗派があまりに地域に密着して浄土宗の入り込む隙を与えなかつたこと。③学問的展開が主であつたこと(大巖差は道誓流の伝法道場として戦国末期に盛んであつた)。のおよそ三点に由因するであらう。

以上述べつくせなかつた点もあるが、一応千葉郡における浄土宗教団の展開についてはこれまでとし、最後に、この千葉郡における大巖差の展開と、地域の宗教勢が著しく異つて対照的な飯沼弘経差の地域展開につき参考まで簡単に触れたい。弘経寺を中心とする下総北部六カ郡(結城、岡田、豊田、猿島、西葛飾、北相馬)の各宗寺院数は、前掲の表(6)によれば、真言の一三箇寺を筆頭とし、次に浄土の六〇箇寺、天台の四三箇寺、真宗の三九箇寺、曹洞の三五箇寺、……と続いている。これを見てもわかるように、この北部地帯は南部とはかなりその宗教事情を異にしてゐる。真言宗の強い点は別としても、日蓮宗などはちょうど千葉郡における浄土宗の立場と似て居り、甚だ影の薄い存在である。これに反して浄土宗教団の北部地帯における位置は真言に次いで二番目であり、しつかりと地域に根を下ろしていると云えよう。この原動力は恐らく飯沼弘経寺であつて、この古刹大檀林を中刻に周囲に盤石なる本末圏を構成し、浄土宗の教線を扶植してゐたものと見られる。この地帯は、南東部香取、匝瑳地帯の次に浄土宗数団の伝道が展開されたところで、早くから他宗の勢力を押さえ浄土宗数団のゴールデン地帯へと進展していったのである、もう一つ云えることは、真宗数団の根拠地であつた常陸に隣接して居り、歴史的に

浄土系宗派の伝道しやすい地盤が整われていたことである。

## むすび

戦国関東浄土宗数団の地域展開について、主に下総国及び相模国における動静を考えてみた。以下、そのでの問題点を列挙すると、次のようになる。

- (一) 地域的には、密教系現世利益信仰の薄いところに教線を伸張させている(密教系と相対立)。
- (二) 密教系現世利益信仰の根強い関東地方における浄土宗数団の伝道には、本質的な限界があり、それ故伝法の中心道場として、檀林寺院を中核にした学問的展開こそ重視すべきではないか。
- (三) また、檀林寺院の存在する武蔵、相模、下総が、質量共に関東浄土宗数団の中心地となった。
- (四) そして、その檀林形態は戦国大名クラス領主の積極的な庇護によって、はじめて確立、発展するものであった。
- (五) 教団内における各法流(系)の盛衰とその地域展開に、ある種の関係づけが想定されること(本末関係⇐法縁関係)。
  - (註1) 「日本仏教の地域発展」(仏教史学全編)頁六五―七四。
  - (註2) 同書頁六八。
  - (註3) 同書頁一五―二四。
  - (註4) 同書「関東地方」の中での笠原一男氏。その他同氏の真宗数団に関する一連の研究。
  - (註5) 同書「東海地方」重松明久氏。「北陸地方」北西弘氏、いずれも真宗数団に関して述べている中に。
  - (註6) 同書「浄土宗」所収の「運門精舎旧詞」より集計した浄土宗寺院旧国・年代別表。
  - (註7) 「常福寺文書」所収「末山由緒録」。
  - (註8) 遠藤元男教授の御教示による。
  - (註9) 「千葉県史科中世編県外文書」所収。
  - (註10) 「大巖寺文書」所収寺院縁起。「檀林生実大巖寺志」(浄土宗全書二十所収)。「成田山史」にも同様の記載がある。